



TITLE:

「自我のための退行」に関する心理臨床学的研究～ロールシャッハ法 及び 「なぐり書き(Mess Painting)」法を通して～(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

伊藤, 俊樹

CITATION:

伊藤, 俊樹. 「自我のための退行」に関する心理臨床学的研究～ロールシャッハ法 及び 「なぐり書き(Mess Painting)」法を通して～. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-01-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13137>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

| | | | |
|--|---|----|-------|
| 京都大学 | 博士（教育学） | 氏名 | 伊藤 俊樹 |
| 論文題目 | 「自我のための退行」に関する心理臨床学的研究 ～ロールシャッハ法及び「なぐり描き（Mess Painting）」法を通して～ | | |
| (論文内容の要旨) | | | |
| <p>本論文は、Kris,E.が 1952 年に提唱した「自我のための退行」という概念を心理臨床学的に探究したものである。端緒は、Holt,R.が 1977 年にロールシャッハ法を用いて、「一次過程」「二次過程」という Freud,S.（1900）の中核概念をスコアリングする基準を作成し、この概念を客観的に測定する道を開いたことによって、数多くの研究が欧米でなされてきたことに著者が着目したところにある。ただし、それら先行研究のほとんどは芸術家・美術専攻学生と一般人との退行の違いを量的に検討したものであり、ロールシャッハ法の内容・形式に踏み込んだ質的・創造的な研究はなされていない。本論文はこの点に着目し、著者の豊富な心理臨床実践経験をもとに、「自我のための退行」の様相を質的に詳細に検討することを第一の目的としている。さらに、Luthe,W.（1976）が創造性を開発する技法として創案した「なぐり描き（Mess Painting）法」を取り上げ、それを「自我のための退行」を促進する技法として再定義し、それによって「自我のための退行」が引き起こされる効果を事例研究として仔細に検討することが第二の目的とされている。そこでは、退行がどのような機序で生じ、それが「自我のための退行」の建設的な在りようどのような関連をもつかが検討され、本法の有効性及び適応範囲について考察がなされている。</p> <p>論文は、4 部構成になっている。第 1 部第 1 章では、「自我のための退行」が Jung,C.G.の「創造的退行」と関連づけて述べられた後、ロールシャッハ法を用いた当該概念の測定について論じられ、上述の第一の目的を設定するに到った問題意識と心理臨床学的意義が述べられている。第 2 章では、「自我のための退行」を促進する「なぐり描き法」についてその方法の説明がなされ、先行研究がサーベイされた後、上述の第二の目的を設定するに到った問題意識と心理臨床学的意義が述べられている。</p> <p>第Ⅱ部は三章から構成されている。まず第 3 章ではロールシャッハ法を用いて芸術家及び美大生の「自我のための退行」について、先行研究の妥当性が検証され、先行研究との量的結果の一致を見た上で、さらにロールシャッハスコアのサブカテゴリーにまで踏み込んで分析がなされている。その結果、美大生は一般大学生よりも退行しやすいが、一方で一次過程のコントロールが良好なことが明らかにされている。またその退行は、内容面では性的衝動の著しい傾向に特徴があり、形式面では画家としての物の見方に関わるカテゴリーに特徴があることが明らかにされている。</p> <p>続く第 4 章では、具象画家と抽象画家によって「自我のための退行」の在りようがどのように異なるのかが比較検討されている。その結果、抽象画家は具象画家に比べて形式面で退行が促進されやすく、とくに「自閉的明細化」などいくつかのカテゴリーにおける退行促進の様相は、個々の抽象画家としての創作スタイルと関連していることが明らかにされている。</p> <p>第 5 章は芸術家である中西學の作品の変容と心理的変容との関連が、20 年の間隔において施行された二度のロールシャッハ法の結果を比較検討することによってなされ、得られた結果がユング心理学や河合隼雄の考え方を背景に考察されている。</p> <p>第Ⅲ部では「なぐり描き法」による検討がなされている。第 6 章では芸術志向をもつ者を含めた 5 名の大学生に対して、「なぐり描き法」の変化をインタビューの経過との関連で検討することによって、「自我のための退行」促進作用が何によってもたらされるのか</p> | | | |

が検討されている。

第7章は、「自我のための退行」促進作用が建設的に機能しなかった1名の大学生の「なぐり描き法」の変化とインタビューの経過について検討され、本法がもつ問題点について考察されている。

第8章は3名の美術専攻大学院生の「なぐり描き法」を通して、本法によってもたらされるイメージの変容および退行促進作用が検討され、それを踏まえてさらに「なぐり描き法」施行前後に実施されたロールシャッハ法の変化が比較検討され、退行促進作用の多様性が考察されている。

第Ⅳ部では、第9章として第Ⅱ部および第Ⅲ部を「自我のための退行」の概念から総合的に考察している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の価値は、クリス (Kris, E.) が 1952 年に提唱した概念である「自我のための退行」を、ロールシャッハ法と「なぐり描き (Mess Painting) 法」を用いて多面的に検討し、人間の創造性を心理臨床学の領域から論じた点にある。

心理臨床学を、力動精神医学を含み込み、幅広く人間心理を探究する実践学問領域と捉えると、エランベルジェ (Ellenberger, E.) による「創造の病」に代表されるように、当該領域発祥のときより多くの心理臨床家が人間の創造性と精神の危機的状況との関連に関心を寄せてきた。人間の創造性は精神の病理性ときわめて密接な関係にあり、とくに創造性を表現する芸術家がどのような機序でそれを表現するのかについては、心理臨床学が深く関心を寄せてきた領域である。本論文は、このようなきわめて広範かつ重層な領域をその背景としている。

著者の関心は、退行という心理機制がいかにして創造的な在りようをもたらすのかに集約される。この関心はきわめて心理療法的な視点であり、これまでは個々の心理療法の事例を検討するなかで論じられてきたものであるが、著者はそれをできるかぎり心理臨床学の方法論を用いて実証的に明らかにしようとしており、この点は高く評価できるものである。

著者はまず自我の防衛機制を初めて体系化したフロイト (Freud, S.) の「一次過程」「二次過程」を取り上げ、退行という概念について論文での位置を明確にした後、クリスによる「自我のための退行」を本論文における中核概念とすることについて述べ、自我と退行の関係を「一次過程」「二次過程」と関連づけて明確にしている。この点は、著者の問題意識が人間の創造性を論じる源流にあることを意味しており、論文に重厚性をもたらしている。

次いで、「自我のための退行」をロールシャッハ法を用いて客観的に捉えたホルト (Holt, R.) を取り上げて論文構成の枠組みを精緻化し、「自我のための退行」を促進する技法としてルーチェ (Luthe, W.) による「なぐり描き法」を導入している。これは著者独自の発想とも言えるものであり、これによって論文に独創性が加味されている。

加えて、本論文に特筆すべき独創性は、ひとりの芸術家に 20 年の間隔を置いて二度施行されたロールシャッハ法となぐり描き法を比較検討している点である。このような縦断的な研究は、著者の長年にわたるこのテーマへの関心と地道な研究活動の成果とすることができる。またそこから、一芸術家の 20 年間に及ぶ創作活動における退行の機序が「二次過程」から「一次過程」への退行にあることを明らかにした点は、当該芸術家へのインタビューや芸術作品と深く関連するものであり、真に興味深い。著者はそこから、ユング心理学や河合隼雄の退行についての考え方を援用しながら、この芸術家の退行の機序が「自我による自我のための退行」というよりも、さらに深層における「自己 (Self) による自己 (Self) のための退行」と言えるのではないかと、インタビュー結果をもとに論じている点は、説得力があり著者の深い考察力がうかがえる。

また、さらに本論文によって以下の諸点が明らかにされている。(1) なぐり描き法の自我のための退行促進作用、(2) ロールシャッハ法からみたなぐり描き法の自我のための退行促進作用、(3) 面接からみたなぐり描き法の自我のための退行促進作用。その他にも心理臨床学的にきわめて重要な指摘もいくつかなされている。たとえば、なぐり描き法の危険性の具体的な指摘、「一次過程」から「二次過程」における意識化には複雑なプロセスが働いていることなどである。

本論文の成果は、今後の心理療法とくに芸術療法の領域に新たな視野を切り開くとともに、人間理解に重厚性をもたらすものと言いうことができる。ただ、惜しむらくは、実際の心理療法事例に基づいた考察がなされていないところである。試問では、なぐり描き法の

臨床的応用に向けてさらなる成果を期待する研究であるがゆえに、さらに臨床例に基づく、多角的な考察の精緻化に向けての議論がなされた。しかし、これらの点は本論文の価値をいささかも損なうものではなく、本論文の観点からの心理臨床学の創造的発展の可能性として位置づけることができるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年11月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては（公表時期未定）、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降